

群 教 セ	F09 - 01
	平16.218集

# 学校復帰につながる支援のあり方

- 不登校児合同体験学習での学びを生かして -

長期研修員 田中 智一  
 長期研修員 宮田 智  
 指導主事 住谷 孝明

## 《研究の概要》

本研究は、不登校児童生徒の参加する合同体験学習で表出された事象をデータとして収集・整理・分析・解釈という円環的な作業を行い、仮説を生成する過程を通して児童生徒理解を図る。指導者が児童生徒と共有場面をもち、課題解決場面を通して児童生徒に問題解決能力や対人関係能力を身に付けさせると共に、児童生徒に対する支援を通して、指導力の向上を図ることが、児童生徒の学校復帰につながる最良の支援となることを提言する。

【キーワード：不登校、合同体験学習、フィールドワーク、問題解決能力】

## 本研究の基本的な考え方

不登校問題は、学校教育上解決すべき重要な課題の一つであり、急速に変化する社会の中で、すべての児童生徒が豊かな人間性や社会性を支える力を身につけ、自己成長・自己実現を図っていくことが今日求められている。

文部科学省が発表した「生徒指導上の諸問題の現状について」(平成15年12月)では、平成15年度の不登校児童生徒は全国で126,212人(前年度比5,040人減)と発表され、不登校児童生徒の減少がみられた。この減少傾向に対し、文部科学省は「熱心な取組が数字として現れた」と評価しつつも、「依然として憂慮すべき状況である」との見方を示している。

本県でも全国の動向と同様に、平成15年度の不登校児童生徒数は1,869人(小学校315人、中学校1,554人、昨年度比56人減)と、前年度に比べ不登校児童生徒数は減少している。しかし、不登校問題が社会の深刻な出来事になるなど、憂慮すべき問題が起こっている。そのため県内でも不登校児童生徒の学校復帰及び社会的自立を目指した取組は、継続的な対応をしていく必要がある。

教育相談グループでは、不登校対策支援総合推進事業を基盤に不登校問題の解決に取り組んできている。今年度も子どもたちへの支援を積み重ね、不登校問題の解決に向け具体的な在り方を構築していきたいと考える。このような状況の中、不登校の子どもたちを対象とした不登校児合同体験学習、北毛フレンドリークラブというフィールドにおける研究の機会を得た。

キャンプ活動は、特別に設定された非日常的な空間で実施され、不登校の子どもたちに自由に安全な雰囲気や人間関係の中で、自主的・自発的な活動や協同生活、困難を乗り越える活動など体験させることができる。その活動の中で課題を解決していくことから自主性、対人関係能力、自己統制力を身につけさせることができると考える。また、指導者は、対人関係能力、生活リズムの確立など、一人一人に応じて課題を見取り、適切に支援していく中で、指導力が向上すると考える。

そこでのフィールド実践をもとに、「子どもとのよりよいかかわり方」を中心とした支援にかかわるモデルプログラムの作成を行い、不登校問題の解決に役立てるとともに、学校の教育活動での応用ができるシステムとして提言し、学校復帰につなげたいと考えた。

## 研究の問い

不登校問題の解決に向けての問いは、以下の3点である。

不登校の子どもが、自らの意志により学校復帰を果たすためにはどのような支援の方法があるのだろうか。（個人）

不登校問題を解決するためには、不登校児合同体験学習（キャンプ）での支援の方法をどのように学校システムに取り入れたらよいのだろうか。

（キャンプでの学びを学校現場で活用）

不登校問題を解決するためには、学校システムをどのように変えていけばよいのだろうか。（学校がどのようにならなければならないか）

## 「不登校問題」の解決にキャンプ活動（不登校児合同体験学習）

### 1 不登校児合同体験学習とは

ここでいう合同とは、子ども同士という意味ではなく、子どもと指導者がともにという意味である。問題は子どもの中にあり、指導者はその解決を支援する人という一面的なとらえ方ではなく、双方にそれぞれ解決すべき問題があり、キャンプという共通の体験を通して参加者一人一人の問題解決能力の向上を図ることをねらいとしている。

### 2 目的（キャンプの存在意義）

キャンプでの集団生活を通して、不登校児童生徒の自主性、社会性、対人関係能力、集団への適応力の育成を図り、一人一人の学校復帰を目指すことにより、不登校問題の解決推進を図る。

### 3 目標（具体的に達成すること）

<参加児童生徒>

・学校復帰に向けた自己課題の解決を通して問題解決能力の獲得・向上を図る。

<指導者>

・子どものニーズを把握し、支援方針を検討し、他の指導者と意見交換しながら支援していくことを通して指導力の向上を図る。

### 4 ねらい（目標達成のための評価規準）

<参加児童生徒>

・自然体験やキャンプ仲間との泊を伴う生活体験を通して、意欲や耐性、連帯感や仲間意識を育てる。

・参加する子どものニーズや実態に基づいたキャンププログラムを通して、自主性や社会性、対人関係能力や集団への適応力を高め、学校復帰に必要な体力や気力、意欲や自信を高める。

<指導者>

・参加する子どもの活動状況や対人関係、キャンプ集団への適応の様子等を把握し、学校復帰を図る上での個々の援助・指導上の課題を明確にし、復帰を支援する。

・参加する子どもにかかわる援助・指導上の情報について観察・収集し、学校復帰に向けての課題や方針を把握する。

5 支援のポイントは「問題解決能力の向上」

不登校の子どもの学校復帰と自立、指導者の指導力の向上をねらった合同体験学習の支援のポイントは問題解決能力の向上ととらえる。

学校復帰場面に向けて育成すべき課題は、対人関係能力、生活リズムの確立など、一人一人に応じて、指導者が見取る必要がある。

参加する子どもには「どんな活動をしようか」「他のメンバーとどのように過ごそうか」などの課題を見つけ、指導者に支援されながら課題を解決する体験を通して、問題解決能力が育つ。

指導者は、キャンプ活動を通して、子どものニーズの把握、支援方法の検討、他の指導者との意見交換に基づく支援といった体験を通して、不登校児への指導力が向上する。

キャンプの構造

キャンプでは、「自分がしたいこと」を大切にを進めていく。このことでキャンプでの目標ができ、目標に向かって課題を解決することで自分を振り返り、成長できると考える。

(1) キャンプの流れ

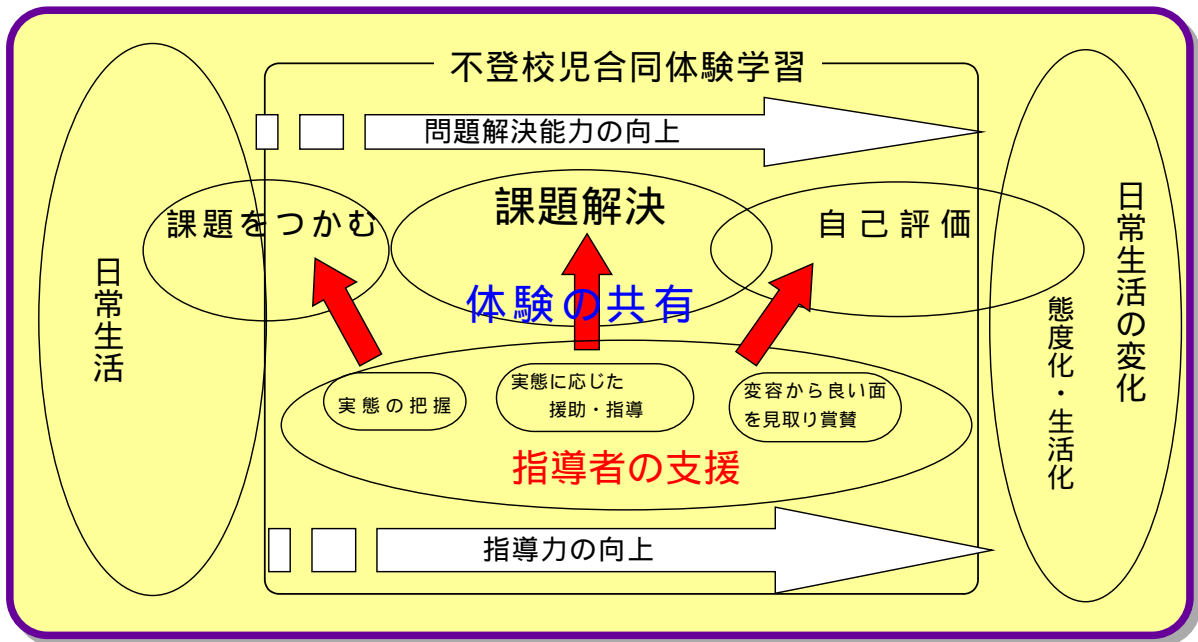


図1 キャンプの基本構想図

(2) 子どもと指導者のキャンプの仕組み

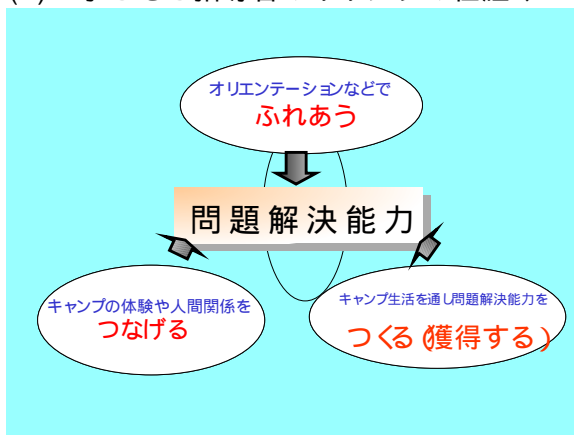


図2 子どもにとってのキャンプの仕組み

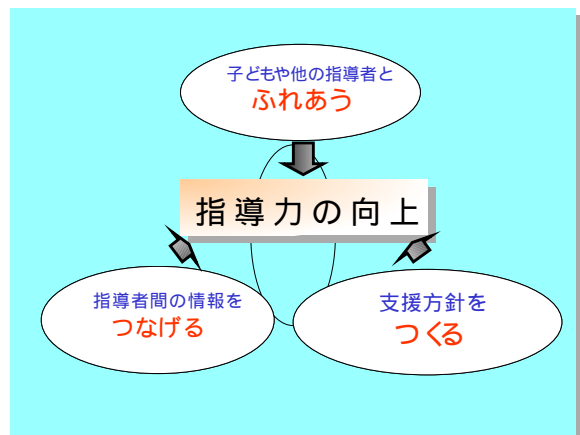
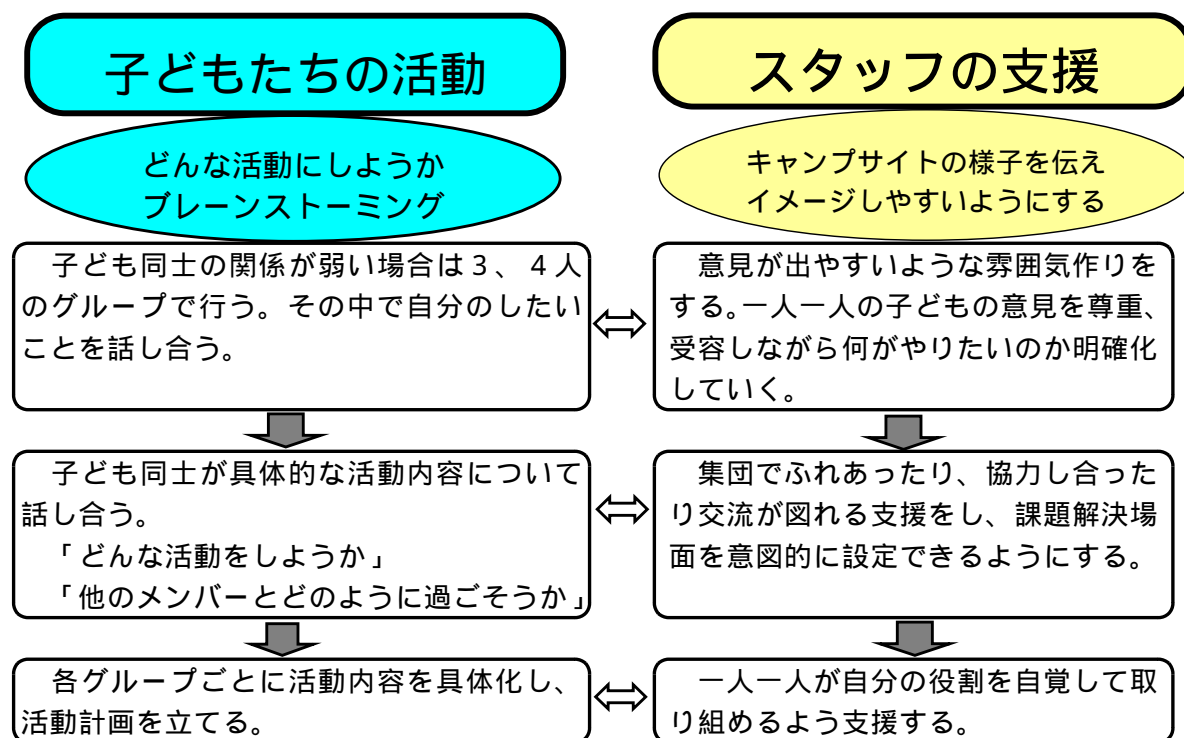


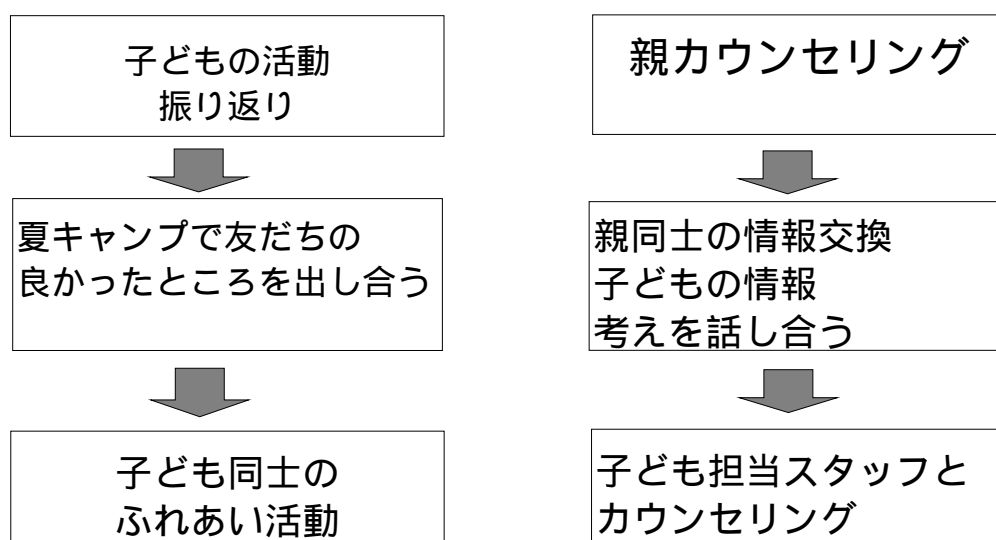
図3 指導者にとってのキャンプの仕組み  
(平成15年度不登校問題課題解決支援資料から)

(3) 子どもたちの活動とスタッフの支援方法



キャンプでの子どもの活動の様子や変容を見取り、キャンプ終了後の親面接で子どもの活動や様子を伝えることにより、保護者と共に学校復帰に向けての支援を行う。また、保護者からは、キャンプ後の様子や変容を聞き、子どもの成長をお互いに確認する。そして、学校復帰や次のキャンプへつなげていくための新たな課題を見い出していく。

### キャンプの振り返り



自分の活動を振り返り、次のステップとする